

琉球大学学術リポジトリ

リーディングの授業とインターネット掲示板（BBS）の利用

— 「特別英語演習」と「英語講読1」の実践を通じて —

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系 公開日: 2007-12-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東矢, 光代, Toya, Mitsuyo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2692

リーディングの授業とインターネット掲示板（BBS）の利用

—「特別英語演習」と「英語講読Ⅰ」の実践を通じて—

東矢 光代

0. はじめに

「インターネット利用の英語教育」および「コンピュータ利用の英語教育」（以下CALL）ということばは既に耳新しいものではなくなってきた。パソコンやインターネットが多くの日本人の生活の一部となり、2002年度からの学習指導要領には、情報教育が大きな柱として掲げられている。CALLの実践報告も数多く紹介されるようになった。ただし先に東矢（2001, 2002）で述べたように、インターネット・コンピュータの活用方法は多岐にわたり、実践は現場の教師の熱意と創造性によるものが大半を占めている。

筆者もいくつかのCALL実践を進めてきたが、そのなかで特に興味を持って実践しているのが「電子掲示板（bulletin board system、以下BBS）」の利用である。ホームページは作成者（書き手）が一方向的に情報を流し、また内容の変更について管理者の手を煩わさなければならないのに対し、BBSはホームページを見ることが可能、かつ書き込みを許可された者ならば誰でも、その場で新しい情報を載せることができる。つまりBBSでは情報のやり取りに双方向性があり、しかも掲載された情報はログという形で蓄積されていく。

本稿では前半、平成12年4月から担当している「特別英語演習」でのBBSの利用を、主に紹介・分析していく。まず開設の経緯・目的・当時の状況を説明し、実際の受講生の反応から見て取れるBBSの利用効果と問題点を探っていく。同時に東矢（2001, 2002）でも指摘した評価の問題を、この事例に当てはめて分析する。後半部では、平成14年4月から担当している「英語講読Ⅰ」でのBBS利用について紹介・議論する。この議論を通じて最後に、外国語での講読（以下、リーディング）の授業におけるBBS利用の可能性を示唆する。

1. 「特別英語演習」と Reading Lab サイト

1.1 サイト開設にいたる経緯

「特別英語演習」の講義をインターネット上のサイトと連動して行なうことを決めるまでには、いくつかの条件が重なった。話が少しまわりくどくなるが、順を追って説明したい。

平成12年前期の開始前、筆者は同学期より新しく担当する共通教育の外国語系科目、「特別英語演習」の授業内容を思案していた。同科目は2年次以上を対象とし、「種々の英文教材の学習」を目的としている。折しも大学教育センター英語系教育・カリキュラム委員会が、FD（ファカルティ・ディベロップメント）の一環として、英語教育改革を推進し成果を挙げている立教大学の教官を迎えて、シンポジウムを開いていた。その質疑応答の中でリーディングの話題が上り、鳥飼久美子先生から日本人学習者の弱点であるトップダウンスキル (top-down skill)、多読についてコメントがあり、野田研一先生からプレジャーリーディング (pleasure reading) の授業について紹介があった（琉球大学英語系教育・カリキュラム委員会、2000）。教師によって選ばれた教材ではなく、学習者が各自の興味に応じて読みたいものを選択して読むプレジャーリーディングは、動機付けの面からも、実践力を養成する多読の面からも、英語教育において好ましく捉えられている活動である。母国語でのプレジャーリーディングを考えれば、その効果について疑問をはさむ余地はない。普段の生活の中で、我々は読書を楽しむ。雑誌、小説、絵本、漫画、写真集、新聞、どれをとっても、強制されることなく手にとって読みたいものを読む行為は、プレジャーリーディングと言える。そしてプレジャーリーディングを通して、語いは飛躍的に習得され（Jenkins, Stein, & Wysocki, 1984あるいは Sternberg, 1987など参照）、表現や複雑な文の構造の理解力も育成される。

規定されたカリキュラムに沿った日本の英語教育の現場で、プレジャーリーディングがあまり実施されていない理由として、「評価」の問題がある。学習者が自分の裁量で好きなものを選んで読む場合、評価のためのテスト実施が難しい。学生が選んだ教材に合わせてテストを何種類も作るわけにはいかないし、作ったとしても、難易度も内容も違うテストをして、学習者間の成績を比較す

ることは困難である。立教大学の例では、学期初めに学生に自分が読みたい英語の本を持って来させ、学期を通じて読ませる授業が行なわれている。評価については、読み遂げるページ数の規定とジャーナルやプレゼンテーションで対応しているとのことだった。

筆者の中ではこのプレジャーリーディングのアイデアと、このシンポジウム以前に受けた「ドーマン法」の講習（人間能力開発研究所，2000年2月）での、読みに対する考え方が結びついた。ドーマン法はもともと脳障害児の訓練法として開発され、その成果は日木流奈くんの速読能力などにも見られる（日木流奈，1999など¹⁴）。また、同訓練法は健全児にも有効な脳力開発につながるとして、世界各国で講習が行なわれている。「読み」のプログラムでは、こどもがどのように読む力を発達させるかを段階的に明らかにし、それぞれの発達段階でどのようなはたらきかけを行なえばよいか、緻密な手法として確立している。その内容としては、読みに欠かせない文字の認識に文字の大きさが関与していること、興味のあるものを選ぶこと、読めるようになるには読む時間を確保すること、そしてテストをしないことが大きなポイントである。これらポイントの中でもっとも衝撃的だったのが「テストをしない」という点であった。

応用言語学・英語教育の分野では、効果を実証するのに絶えずテストが用いられる。リーディングであれば、評価の際にテキストの内容理解度テストを行なうのは、あまりにも当然のことで、「テストをしない」という考え方にはじめはついていけないと思った。しかしドーマン法では「テストをしなくても、理解したか、しなかったかは、本人が一番よくわかっている」というのである。さらに「読ませるためにテストを用いるのは間違っている。読むのが面白ければ、テストなどなくてもこどもはどんどん、興味のあるものを読んでいく。」という。現実の生活での母国語の読みを考えれば、これらの指摘は確かに的を得ている。暇な時間に、楽しむために (for pleasure) 何かを読むとき、我々は読みたくないものをあえて読もうとはしない。読んだ文章に対する理解度テストなど、もちろん受けない。しかしながら自分がどの程度内容を理解したかに関しては、かなり明確に実感することができる。

「特別英語演習」にプレジャーリーディングを取り入れたい。しかもテスト

ではなく、何か別の評価方法はないかと探している折に、インターネット上のサイトでBBSという書き込み式の掲示板が設置できることを知った。また、付属図書館の電子情報係が当時、そのようなサイトの作成・設置・管理を請け負ってくれることがわかった。そこから解決の糸口が見つかり、BBSを活用して受講生に読んだ教材の感想や紹介を書き込んでもらい、それを評価することを思いついた。また、教室外で普段読書を楽しむときのように、読んだものについての意見交換ができれば、面白いだろうと考えた。そこでサイトに掲載したい情報とウェブページのレイアウトマップを作成し、図書館情報係と内容を検討し、サイトの作成およびメンテナンスを引き受けてもらった。

1.2 サイトの概要

「特別英語演習」東矢ホームページは、琉球大学付属図書館情報係の協力により平成12年4月12日に開設され、平成14年6月20日現在、2279名の来サイト者数を記録している。2年間で2000名という少ないように聞こえるが、2年間ののべ受講者数は72名であるので、利用状況は決して悪くないと自負している。図1は現在のインデックスページの写真である：

右のメニューの見たところをクリックしてください。

=更新情報=
 01/11/01 今学期使われないメニューは「Archive」に移動しました。
 01/11/01 先生が授業の感想を書くページ「Class Update」がオープンしました。
 01/10/23 「Opinions」BBSのデザインが変わり、各メッセージごとにレスが付けられるようになりました。
 01/10/10 2001年度後期授業開始。

- * Class Update
今日はこんな授業でした (185)
- * Books and Articles Recommended
何を読んだらよいかわからない人はここから始めよう (432)
- * Internet/Library References
図書館の機能を活用して読みたい本や雑誌を探そう (272)
- * Opinions (or Let Me Tell You!!)
他の人は何を讀んだのか(教材や授業への感想、言いたい放題!) (1812)
- * Reading Materials Recommended
先生おすすめの読み物、いろいろ (242)
- * Reading Rescue Tips
英語でうまく読めなくて困ったときは (274)
- * Reading Lab Policy
この科目(講座)についての教育の理念 (227)

図1：「特別英語演習」東矢ホームページ（インデックス）

インデックスの項目は、開設後1年半（3学期）が経過した平成13年前期終了後に見直し、改編を行なった。BBSを離れた実際の授業形態・クラスでの活動を学期ごとに調整していった結果としての改編であった。表1は、2年半の活動をクラス内とサイト上に分けてまとめたものである。なお「フィードバック」の欄は、講義について学生からフィードバックを得た方法を示している。

表1：「特別英語演習」（平成12年度前期～14年度前期）授業及びサイトの 변화の流れ

	登録人数	授業形態・内容の変化	サイト上の変化	フィードバック
12・前	21名	<ul style="list-style-type: none"> ○クラスでは読むだけ ○「おすすめの読み物」を学期に1度、教官にメールで送付させる ○書き込みにペンネームを使用させる 	<ul style="list-style-type: none"> ○サイトを開設 ○全体のBBS (Opinions) と本人及び教官だけが書き込めるBBS (Journal) を配置 	個別インタビュー
12・後	11名	<ul style="list-style-type: none"> ○読み物を増やす ○読んだものを口頭で発表させる ○全員で同じ洋画を見る 		
13・前	28名	<ul style="list-style-type: none"> ○読み物に講読用テキストを導入 		個別インタビュー
13・後	12名	<ul style="list-style-type: none"> ○少人数のため、パソコン室を常時利用。授業中の書き込みを容認する ○「おすすめの読み物」の課題を廃止 	<ul style="list-style-type: none"> ○担当教官だけが書き込める Class Update を新設 ○個人の書き込み用 BBS を廃止し、学生の書き込みを Opinions に一元化する ○Opinions BBS で書き込み時の色の選択が可能になり、返信機能が追加される 	アンケート
14・前	21名	<ul style="list-style-type: none"> ○ Amazon.com を用いた洋書の検索と、情報の共有。 ○やさしい洋書(児童文学書)の導入 		

1.2.1 平成12年度前期～平成13年度前期

第1回目の平成12年度前期の実践では、読む時間を最大限に確保するために、ホームページの利用は授業時間外とした。ただし学期初めには、サイトのオリエンテーションを2回コンピュータ室で行ない、Opinions BBSの記入およびJournalのパスワード機能を確認した。なおここで述べるJournalとは雑誌の意味ではなく、個人の日記のようなものを指し、この講義では受講生が読んだものに対する感想を書き留めていくものを表わす。残りの講義は普通教室で各自、好きな英語の読み物を読む活動に終始した。学生からの質問には講義時間中応えた。一般の「読み」についての相談を受けた場合は、個人的にフィードバックを与えると同時に、Q&A形式で「Reading Rescue Tips」の欄に掲載し、他の受講生の参考とした。Opinions BBSで、筆者は学生どうしのディスカッションを期待したが、それは実現せず、同時に開設した個人のJournalの利用が多かった(後述)。学期中筆者は、受講生に個別インタビューを行ない、講義に関するフィードバックを得た。その結果、第2回目の平成12年後期では、クラスで読んだものを口頭紹介する活動を導入した。また受講生の数が少なく活気にやや欠けていたので、英字キャプション付きの洋画ビデオを観る活動も取り入れた。第3回目の平成13年度前期の講義でも口頭発表を取り入れ、感想を蓄積するログとしてJournalとOpinions BBSを利用してもらった。学期途中で実施した受講生への個別インタビューの結果、サイトデザインの改訂が必要だと感じ、学期終了後、管理者と検討した。

1.2.2 平成13年後期～平成14年度前期

平成13年度後期からの大きな変化はサイトにおけるJournalの削除と、Class Updateの新設である。Journalの削除については1.4で詳しく述べる。Class Updateは教官が、教える立場から見たクラスの活動を記録するBBSである。制限があり、担当教官と管理者しか書き込むことは出来ない。また時間を見つけて書き溜めたいと思っていた「英語格闘歴」の項は削除した。もともとこの項は、筆者がいかに英語のリーディングと格闘してきたかをつづって、英語を読むのに四苦八苦している学生を勇気付けるためのものだった。しかし、

はりきって「英語で書いていこう」としたものの息切れがして続けることができず、中途半端なものになっていたので、項全体を削除してもらった。

1.3 BBS の特性

特別英語演習以前にも、筆者はインターネット利用の英語教育について関心があり、他の授業では簡単なウェブページを作成し、公開していた。担当教官がウェブページを作成し公開するメリットとしては、①必要な情報を小分けして載せ、辞書や索引的な使い方を学生に行なわせることができる、②講義時間外でも学生は情報にアクセスできるので、宿題・課題の指示がしやすい、③変更（情報の追加・削除など）が比較的簡単にできる、などの点である。他の利用法として、学生の作品や既年度の活動の記録を載せたりもしていたが、すべて原稿をアップロードする方法を採っていた。

ウェブページが作成者の意図を大きく反映し、情報を一方的に提示するのに対し、CALL でよく利用される電子メールは双方向性のコミュニケーションを可能にする。担当教官が与えた課題を学生が電子メールで提出し、担当教官がメール上でフィードバックするなどは、その最たる例である。三宮 (1998a,b) は、直接の対面コミュニケーションに比べ、電子メールのコミュニケーションでは、ことばを文字にし、さらに読み返したりする作業を通して、質問・意見などがよりまとまった形で表現されやすくなるとしている。

電子メールが送信された相手としかやりとりを行なわないのに対し、BBS ではメッセージが不特定多数の読者に読まれる。メッセージはある特定の相手に対して書き込まれることもあるし、読者一般に向けて発信されることもある。現在特別英語演習の Opinions で使っているような、返信機能付の BBS であれば、自分の書き込みの下に読者のコメントが記載されることによって、「誰かが確かに自分のメッセージを読んでくれた」ことがわかる。そしてそこには、自分のメッセージも、それに対する返信も読んでいるであろう、また別の読者の存在が見え隠れする。

このように BBS は不特定多数の観察者がいる、なかば「公」の場である。「公」ということを深刻に考えるならば、書き込みをためらう者もいるだろう。

しかも電子メールと違って、書き込んだ者は何人の人が自分のメッセージを読むことになるのか、誰が読むのかなど、おおよその目安はつけられても完全には把握できない。ただし読者の匿名性と同時に、ペンネームの利用などにより書き込み者の匿名性も高めることは可能であり、そうすることによって書き込み者の「不特定者に読まれる」と感じる心理的負担は、ある程度軽減できる。

ウェブページおよび電子メールと若干異なる BBS ならではのもう一つの特徴として、情報を蓄積するアーカイブ機能が挙げられる。情報の提供者が書き込み者であり、決してサイト作成者・管理者だけではない点で、BBS はウェブページと一線を画すが、同時に BBS では書き込まれた情報がログとして残っていく。結果として書き込み者は自由な時間帯に、自分の書き込みに対する反応を確認したり、新たな書き込みをすることができる。しばらくサイトを覗く機会がなくても、再び訪問したときに、不在の間どのような議論がなされたかをログを追っていくことができる。全く新たに途中から参加する場合でも、過去のログによって適切な情報を得ることが可能なのである。

1.4 ページデザインと利用の実際

このような特性を持つ BBS だが、特定の授業に利用するためのデザインに関して、実践してみて判明したことがいくつもあった。

まず実践を始めた平成12年度前期には、「公」の場への書き込みが苦手な学生のために、担当教官と本人しか利用できない個人用の BBS (Journal) を設定し、Journal か Opinions のどちらかの BBS に、自分の読んだものについての感想を書いていくように指示した。内気で、みんなが読む Opinions に投稿するのは恥ずかしいと思う学生は Journal に書き込むだろう。でもほとんどの学生は、この両方を用途に応じて使い分けるだろうと予測していたのだが、実際には、受講生は Opinions にほとんど書き込まず、自分の Journal に黙々と感想を溜めていった。筆者は、開かれた BBS である Opinions への書き込みで受講生同士の交流・意見交換が活発化したり、個人の Journal であっても仲良くなった受講生どうしが、中身を読むためのパスワードを交換したりというような状況を期待していたが、現実とは全く異なっていた。また本来、担当

教官への質問や意見は Opinions に書き込んでもらいたいと思っていたのだが、Journal を担当教官と学生個人のみのもやりとりの場と誤解して、教官宛でのコメントを Journal に書き込む例が見受けられた。

Journal のような書き込み者制限付 BBS の設置は、プライバシーの保護および参加者の性格への配慮という点では好ましいが、実際に Journal を使った受講生からは「他の受講生の感想を見ることができないため、自分が書いている内容や量が適切であるかどうか、判断できず不安である。」という意見が出された。また学生へのインタビューを通して、他人が読める形でインターネットに書き込むことへの抵抗感が、学期が新しくなるにつれて減ってきたことがわかった。内気な学生からは、「掲示板に書き込むのは、クラスのみみんなの前で口頭発表することほど、緊張しない。」という感想が寄せられた。

学生によるインターネットの利用は、平成12年度の初回に比べ、学期を追うごとにスムーズになっていた。第1回目の学期では、エクスペローラの開き方やアドレスの打ち込み方の指導、半角と全角入力の切替などを手伝ってやらねばなかったが、5回目にあたる現平成14年前期では、第1回の講義であっても、口頭で指示されたとおりにエクスペローラを立ち上げ、特別英語演習のページを自由にブラウズするほど、学生の情報リテラシー能力は向上している。

このような状況を踏まえ、平成13年度後期には Journal BBS を廃止し、感想を書き込む場所を Opinions BBS に一本化し、返信機能付きにしてもらった。これにより、学生が他者に読まれることを意識しつつも感想を書き込む体制が確立したと言える。同時に、教える側の視点から書き込みを行なう、「教官の独り言」のようなイメージの Class Update を開設してもらった。この BBS には管理者モードを設定し、担当教官とサイト管理者（図書館電子情報係）だけが書き込めるようにした。

Journal を廃止したデメリットとしては、成績のつけやすさが半減するという点がある。Journal では感想が個人のログとして残るので、各受講者の書き込みの内容・回数が一目で見取れる。そのため、受講生どうしの比較もしやすい。また書き込み用 BBS を、公の場である Opinions のみにした場合、控えめな性格の学習者には負担となる可能性も残っている。しかしこれらのデ

メリットを犠牲にしても、変更は必要だと思われた。

平成13年度後期に、この新形式のサイトを実際に使ってみた。当時の学生は Opinions への書き込みにさほど抵抗感を持っているようには見えず、受講生の感想が掲示板を飾った。筆者も返信機能を使い、コメントを添えたりした。Journal の頃より、もっと開放的でリラックスした雰囲気の中で、サイト上のやりとりができると感じた。読んだものの感想・紹介は「他の人が説明を聞いて、読みたくなるように行なう」ことを奨励しているので、自分が読んだものを勧める記述も現れた。この学期以前には「おすすめの読み物を1つ選んで、情報をメールで担当教官に送る」という課題を与え、集まった情報を「学生おすすめの読み物」という項目にまとめて掲載していたが、新しい Opinions BBS では、書き込み自体が「おすすめ」的になるため、この課題は平成13年度後期から出していない。

Opinions BBS の新形式により、学生の書き込む活動は、より多くの読者にアピールする可能性が高まった。感想はページを開いたクラス受講者あるいは一般のサイト訪問者に共有されやすくなった。Journal と比較すれば、受講生は互いに親しみを感じやすい環境が整ったように見える。

しかし学生が他の受講生の感想に質問やコメントを寄せることは、依然として非常にまれであり、受講生どうしの読みの体験の共有は中途半端なままである。担当教官としては、学生の書き込み全部に返信することに躊躇している。たとえ全部に返信を書き込んだとしても、それは受講者個人個人と教師とのやりとりに過ぎない。学生どうしの交流を助長するとは考えにくく、むしろ「返信できる[権威を持っている]のは教官のみである」という印象を与えてしまいかねない。「他の受講生の書き込みに対し、ウェブ上でコメントするように」という指導に応えたのは平成13年度後期で1名のみであった。しかも彼女の書き込んだ質問に対する反応はなく、尻切れトンボで学期は終わってしまった。他の受講生からは、「自分などが他人の書き込みにコメントするなどおこがましい。とてもできない。」という意見が寄せられた。「たまたま同じ講義に居合わせただけの、もともと面識がないクラスメートに意見するなどとんでもない。自分などにその資格はない。もし書き込んだら不快感を与えるのではないか」

という心配があつて、簡単には、返信を書き込むという行動を起こせないらしい。

筆者は、大学という高等教育の場における「お互いから学ぶ」という姿勢を重視し、受講生どうしの交流にこだわっている。日本人が英語を習得しようとする際の大きな障害であると考えられる要因として、よく「性格・国民気質」が挙げられるが（例えば荒木，2000参照）、確かに日本人は歴史的・地理的に、違いを違いとして受け入れることが苦手であり、沈黙を金とする文化的傾向がある。昨今ではそれに加え、乳幼児の段階から、親子共々感情を表出することが乏しくなつてきており（東，1999）、感情をことばにすることを学習する機会を失ってしまった子ども達が、そのまま大人になっていく現象（巖谷，2001）が顕著である。また高井（1998）が警鐘を鳴らしているように、日本人の学生は今までの学校教育において、批判したり意見を述べることによって理解を深める訓練を受けてきていない。これらの結果として学生の、協力したり共感したりする能力は非常に弱くなっている。青山学院大学で帰国子女の学習ストラテジーの研究を行なっている木村松雄先生によると、日本人学生と帰国子女の大きな違いは「自己教育力」にあるという。つまり日本人学生はみずから情報を収集し、学びとつて問題解決を行なう能力が弱いことになる（木村，パーソナルコミュニケーション）。逆に帰国子女の場合、外国生活が長いほど「自己教育力」指標の結果が高くなるという。

BBSに感想を書き込ませていくことは自己を表現することであり、またお互いの感じ方を知り、異なる捉え方や意見を知ることにつながる。受講生どうしの直接的な対話はまだあまり見られないものの、「書く」モードでこのような場を設け、互いから学ぶ体験をすることは有意義だと考えられる（佐伯，1997も参照）。

2. 「特別英語演習」における成績評価の問題

「特別英語演習」においては内容理解度のテストを行なわず、積極的に楽しんで読む態度を養えたかどうかをサイトへの書き込みで評価すると決め、講義に臨んだ。最初の学期は特に、クラスでは読むだけの活動に終始したため、書き込む意義が大きかった。しかしフィードバックをもとに、クラスでの活動に

口頭発表を取り入れた第2学期からは、読んだものを書き溜めていく作業の意義が半減してしまった。口頭発表に対する受講者の意見はおおむね好意的で、「これがあるから、授業時間中しっかりと読まなくては、という気になる。」という意見が大半である。しかし口頭発表の導入により、「クラスで既に発表して、クラスメートも先生も自分が今日どんなものを読み、どんな風に取り組んだか知っている。にも関わらず、何故同じことをサイトに書き込む必要があるのか」と考える受講生が出てきた。基本的に評価の基準を、サイトへの書き込み回数、量と内容で捉えていた筆者には、不都合な展開であった。口頭発表を行なっていなかった最初の学期が、(Journalではあったが、)BBSの利用が最も活発だった感がある。

「評価はサイトへの書き込み回数、量と内容で行なう」とクラスで伝えても、書き込みには不熱心な受講生もいた。クラスで熱心に読み耽り、内容をノートに書きとめてまで発表していた学生である。「もっと書き込むように」と成績評価の基準を説明しても、本人は特に成績にはこだわらず、自分が満足いく活動ができていればそれで充分満足しているようであった。これは萩原・井上(1999)による「作品が取り組みの過程を正当に反映しているとは限らない」という指摘の具体例と言える。また中国からの留学生で、英語を読むことも好きで中身のある口頭発表をしていた学生が、「日本語を書くのは苦手」という理由で書き込みの回数が少なく、評価に苦慮した場合もあった。結局は、「評価はサイトへの書き込み回数、量と内容で行なう」という当初の評価基準を修正し、これに「口頭発表の内容と、講義時間中の取り組みも評価の対象とする」とせざるを得なかった。BBSへの書き込みを評価の中心に据える場合、学生が書き込まなければならない必要性をどう創出するかは大きな課題である。口頭発表とBBSの位置付けを模索し、評価における適正なバランスを見つける必要がある。

3. 「英語講読Ⅰ(ハリー・ポッター)」でのBBSの活用

リーディング授業でのBBSの別の活用例として、平成14年4月から担当している「英語講読Ⅰ」の授業とサイトを紹介したい。「英語講読Ⅰ」は、英語

を専門とする法文学部国際言語文化学科（欧米系専攻）2年次対象の科目で、現在の登録人数は35名である。まとまった量の英文を読ませ、英語力をつけるとともに、300ページ以上あるペーパーバックを読み終えたという自信をつけさせることを目的に、話題性のある *Harry Potter and Philosopher's Stone*（邦訳『ハリーポッターと賢者の石』）をテキストに選んだ。講読だからといって教官一人がすべて説明する、という一方方向のコミュニケーションを避ける、さらに学生ひとりひとりが、当てられたところだけではなく本全部に目を通す、という見地から、毎章 Study Form を提出させ、担当学生が集計した結果をもとにペアあるいはグループで、担当章をクラスで解説する方式を採用した。同時にこの講義でも BBS を活用することによって、学生が積み上げるものが彼らの自学習の助けとして形を残すとともに、受講生以外のサイト訪問者にも活用されればおもしろいだろうと考えた。このアイデアは「特別英語演習」と同じく、図書館の好意で実現した。

3.1 サイトの概要とデザイン

サイトのデザインにあたって、インデックスの目次タイトルを以下のようにした：

- ① 担当教官からのメッセージ&担当教官へのメッセージ
- ② シラバス・講義スケジュール
- ③ 半年間でハリーポッターの英語をマスター！
- ④ 私のハリーポッター読書体験
- ⑤ Next Step
- ⑥ 図書館ホームページ

このうち⑤と⑥は図書館との協議の上設定された。その利用の詳細についてはこの稿の趣旨を離れるので、ここでは①～④の説明を行なう。

このサイトのデザインは、「特別英語演習」の実践の反省上に成り立っている。まず講義である以上、②のシラバス・スケジュールは訂正を加えない形で

掲載するのが適当であった。①は「特別英語演習」における Class Update のように、講義をしている担当教官の言い分、つまりなぜそういう講義をするのか、大変な課題でもどういうメリットが学生にあるのかなどを発信する場所として設けた。また「特別英語演習」には担当教官へのメール送信機能もついていたが、教官への質問や確認のメッセージが Opinions の BBS に書き込まれることが過去数回あり、Opinions に普段載せられる情報とは区別した方がよいと思われた。そこで英語講読 I のサイトでは、教官と受講生（もしくは外部のサイト訪問者）のやりとりを中心に行う BBS として、①を設けた。

サイトのメインとなるのは③で、ここに載せられる情報が、ハリポッターを読む際のスタディガイド的役割を果たすことを期待して、開設した。もともとは章別に BBS を設けてもらうことを希望したが、サーバーへの負荷などを考慮して、3部に分けることで落ち着いた。クラスで発表したことをもとに、その章を読むのに有益だと思われる情報を、章の担当者が書き込めるように設置した。載せる情報としては Vocabulary, Idioms&Phrases, Translation, Summaryなどを想定した。

さらに④で「私のハリポッター読書体験」と題した BBS を設けて、学生にハリポッターを既に読んだかどうか、どのような感想を持ったかなどを書き込ませる場所とした。「特別英語演習」でアンケートを実施したときの反省を踏まえ、担当教官が知りたいと思う情報を引き出すような設問を載せ、それらに答える形で感想を書くように指示した。

ホームページ製作者の負担を軽くするために、BBS は同じ形式のものを利用した。ユーザー登録・パスワードなどをなくし書き込み者の制限を外した。それぞれの書き込みについて返信機能を設け、返信が書き込みの下につながって表れる形式とした。

3.2 活用の実態と問題点（中間報告）

筆者が担当する「英語講読 I」は平成14年度前期の開講科目であり、本稿を執筆中の同年6月現在は、まだ講義が続いている。よってここでは中間報告としてまとめる。

インターネットの活用はクラス時間外とし、講義は普通教室で行なっている。平成14年6月現在で判明したBBS利用のメリットは以下のとおりである。

まずBBSの特性である書き込みの容易さとアーカイブ機能は十分果たされていると考えられる。書き込みには教室での接触だけでは直接見えない、学習者個人の興味や感情が綴られている。モードの違い（書きことば vs. 話しことば）により、クラスでは発言の少ない受講生でもBBSに書き込んでくれる。クラスメートの前や、教官に面と向かっては伝えにくい「授業が難しい」というあえぎや「こういうことをもっと知りたい」という要望がすでにBBSに書き込まれた。それを読み対応することによって、教官は教授内容や進度を調整することができる。また、BBSは受講生以外にも公開されているため、他の学生や教官に参加を呼びかけ、物理的なクラス内に留まらない学習コミュニティに発展し得る。

対する現在の課題としては、BBS分類の意図が書き込み者に伝わりにくい、という難点が挙げられる。このホームページでは担当教官とのやり取り用、担当した章の発表のまとめ書き込み用、そしてテキストを読んだ感想の書き込み用と、3つのBBSを準備したが、この分類はあくまで作成した教官の都合に合わせたものであり、サイト訪問者が必ずしもこの分類を理解し、適切な場所に書き込んでくれるとは限らない。ページ作成者の意図とは別に、訪問者には尋ねたいことや主張したいことがあり、それらが用意されたBBSの範疇に入らずにどこかのBBSに書き込まれることがある。そのような場合は、「この場所にそぐわないから」ではなく、真摯にメッセージを受け止め、応答する必要がある。

もう一つの課題は「特別英語演習」と同じく、書き込む意義をどう捉えるかという問題である。講義では筆者が第1章の担当者となり、クラスでの説明・発表後、対応するBBSに内容をまとめて書き込んだ。その後、クラスで幾度となく続きを書き込むよう、発表を終えた受講生に促すのだが、なかなか書いてくれない。学期初めに配布したシラバスにも、書き込みは課題として謳ってある。にも関わらず書き込みがなされないのは、やはりクラスで行なった口頭発表と情報が重複するため、書き込みの必要性が認識されにくいためだと思う。

また「読書体験」のBBSには学期初めと学期末に書き込むよう指導しているのだが、受講生が好きな時にサイトを訪問する結果として、書き込みは少しずつ少しずつ増えてきており、まるでリレーエッセイのようになってしまっている。パソコン室に集まって授業時間内に書き込ませる方式でない場合、BBSへの書き込みをどう促進していくかも今後検討の余地がある。

4. まとめおよび今後の課題

理解力のテスト中心ではなく、学習者コミュニティの成立の場としてのBBSを利用したリーディングの授業では、お互いの読みの経験を分かち合い(share)ながら — つまり読んだものに対する様々な反応に対して共感したり、議論したりしながら — リーディング能力を高めて行くことが期待される。日本人は自分の意見を持ち、他人の前でそれを表現することが苦手といわれる。その点では、クラスでの発言モードと異なる書きことばモードで、自分の意見や感想を表現することは、その延長上にある英語でのコミュニケーションをより円滑に行なうための、よい訓練だと考える。

BBSの利用はまた、その時々でのコミュニケーションをログという形で残してくれる。「特別英語演習」のサイト利用を通じて実感したのは、半期で完結し、受講生にとっては通常その場半年限りの活動である大学の授業が、メンバーを変えつつ脈々とつながっていく姿が、形となって残っていくというメリットである。第2回目以降、受講生は学期初めにまずサイトをのぞき、過去に同じ講義を受講した学生の息づかいを感じてきた。サイトには教官が提供する、英語のリーディングや本の選び方に関する情報も掲載されているが、観察していて受講生がよく利用しているのは、やはり過去の学生の「おすすめの読み物」であり、Opinionsに蓄積された過去の感想である。

学生のBBS利用は往々にして、担当者の意図を超えた範囲でも起こりうる。この点に関して筆者は2つのクラスで、改訂作業も行ないながら、効果的な分類およびデザインを模索してきた。しかし、いまだ学生どうしのBBS上での交流を生み出すには至っていない。サイトのデザインも去ることながら、クラスでの受講生の雰囲気や人間関係、サイト利用の口頭指導も含めて、リーディ

ングを効果的に行なうための、学習コミュニティが成立するようにしたい。

今後展開したい方策の一つとして、離れた大学間での並行授業による学生の意見交流を挙げたい。例えば同じように「ハリイ・ポッター」を読んでいる本土の大学クラスとBBSで意見交換してはどうだろう。普段クラスで見かけない、しかしどこかで同じように勉強を進めつつ、BBSに書き込む「仲間」の存在があれば、物理的距離を超えるというインターネットの特性が充分発揮される。そうすれば利用の必然性が生み出され、より広範囲の学習コミュニティに発展する可能性は高いと考えられる。

「特別英語演習」ホームページアドレス：<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/tt/mtoya>

「英語講読Ⅰ」ホームページアドレス：<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/tt/reading>

謝 辞

「特別英語演習」「英語講読Ⅰ」のホームページ制作は、琉球大学付属図書館電子情報係によるものです。記して感謝します。

注

筆者は2000年2月に神戸で行なわれた人間能力開発研究所のセミナーにおいて、実際に、日本流奈くんのように常人離れしたスピードで速読を行なう障害児を見ている。さらに文字盤を用いて行なうFC (Facilitated Communication) の様子も目の当たりにした。筆者は決してこれらの能力開発訓練法の有効性を否定しないが、健常な乳幼児へのフラッシュカードを用いた一連の「右脳開発」訓練については、子どもの脳への影響を慎重に調査・検討する必要があると考えている。

引用文献

- 荒木創造. 『英語 話せる性格話せない性格：なぜ日本人ならではの長所がカベを大きくするのか』東京：青春出版社ブレイブックス, 2000.
- 木村松雄. パーソナルコミュニケーション. 2002年5月.
- 三宮真智子. 「ネットワークコミュニケーション実験研究：電子討論と対面討論の比較」大隅紀和編著『インターネットと教育実践』名古屋：黎明書房, (1998a) : 186-195.
- . 「ネットワークコミュニケーション事例研究：教師と学生の電子メールによる指導助言活動の事例」大隅紀和編著『インターネットと教育実践』名古屋：黎明書房, (1998b) : 196-212.
- Jenkins, J., Stein, M., & Wysocki, K. Learning vocabulary through reading. *American Educational Research Journal*, 21(4), 768-788.
- Sternberg, R. J. Most vocabulary is learned from context. M.G. McKeown & M.E. Curtis (編), *The Nature of Vocabulary Acquisition* (pp.89-106). Lawrence Erlbaum. 1987.
- 高井高盛. 『脳力を伸ばす学び方』東京：筑摩書房, 1998.
- 東矢光代. 「CALLが外国語教育に及ぼす影響（1）：テクノロジーは教師を超えられるか」言語文化研究紀要 (Scripsimus) 10, 琉球大学法文学部, (2001) : 63-86.
- . 「CALLが外国語教育に及ぼす影響（2）：教師は何をすべきか」欧米文化論集 14, 琉球大学法文学部, (2002) : 113-131.
- Doman, G. & Doman, J. *How to Teach Your Baby to Read*. (グレン・ドーマン&ジャネット・ドーマン著. 前野 律訳. 『赤ちゃんに読みをどう教えるか』) 東京：ドーマン研究所, 2000.
- 人間能力開発研究所. 『自分の障害児にどうしたらよいか』セミナー資料. 神戸. 2000年2月.
- 萩原 潔・井上裕光. 「情報教育で教師が変わる」藤岡完治・大島 聡編. 『学校を変える情報教育：生きる力を育てるために』東京：国土社, (1999) : 115-141.

- 東 茂由、『子どもの体に異変が起きている』河出書房，1999.
- 日木流奈、『はじめてのことば：わからんちんのコチコチ大人へ』東京：大和出版，1998.
- 藤岡完治，「『生きる力』と情報教育」藤岡完治・大島 聡編，『学校を変える情報教育：生きる力を育てるために』東京：国土社，（1999）：27-50.
- 巖岩（ほろいわ）奈々，『感じない子ども、こころを扱えない大人』東京：集英社，2001.
- 美馬のゆり，「ネットワークにおける学習の意味」大隅紀和編著『インターネットと教育実践』名古屋：黎明書房，（1998）：167-188.
- 琉球大学英語系教育・カリキュラム委員会，「共通英語教育改善に関するシンポジウム」琉球大学大学教育センター，『1999年度ファカルティ・ディベロップメント：教養英語教育の改善に関する研究：国際舞台で活躍できる英語運用能力の養成を図る』沖縄：琉球大学，（2000）：4-44.

Abstract

Reporting on the use of BBS (bulletin board system) woven into two English Reading courses, this paper addresses the issue of Japanese college-level students' lack of ability to learn from each other. The main purpose of setting up a BBS in these courses was to provide students with an opportunity to express themselves and share reading experiences with each other. The instructor, teaching one of such courses for five semesters, found that BBS communication of Japanese college students had been mostly between individual students and her, not among students themselves. Some modifications in teaching and homepage design helped students to feel more comfortable in expressing their feelings and opinions on the BBS; however, the students were still afraid of commenting on each other's comments. With the intention and hope of establishing "learning community" among Japanese readers of English, the instructor argues that BBS, used with some caution, can be useful and effective tool for language teachers.

*URL: <http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/tt/mtoya> (Pleasure Reading)
<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/tt/reading> (Harry Potter)

Both sites have been realized and maintained by staff at the Library Information Technology section at University of the Ryukyus. The original ideas and contents, as well as faults, of the Websites were of the author.